

物語教材における学び合いを支える言語活動の充実

～「ごんぎつね」における「読み語り」と

「ウェーブリーディング」の活用～

小杉 栄樹

本研究では、小学校国語科において「学び合いを支える言語活動」を充実させる方法として、物語教材における「読み語り」と「ウェーブリーディング」を中心とした取り組みについて検証していきたい。言語活動の充実が実践課題となっている中、「学び合いを支える言語活動」とは、その場その場で教師によって与えられた指示に従って学習を進めるのではなく、子どもたち自身が明確な意図をもって学習を進めていくことができる言語活動と考える。第2期教育振興基本計画（平成25年6月閣議決定）では、「自ら課題を発見し解決する力、他者と協働するためのコミュニケーション能力、物事を多様な観点から論理的に考察する力などの育成を重視する」とし、「生涯にわたる学習の基礎となる力」と「答えのない問題に向き合う力」の育成を重要課題と位置づけている。それ故、国語科学習においても、知識習得中心の学習から、豊かな読書や実体験に基づいた深い思考力と表現力が要求される学びへと転換していく必要があると考える。クラスみんなが安心して学べる学級風土の中で、子どもたち一人一人の課題意識を深化させながら夢中になって学べる授業をめざし、充実した言語活動を取り入れた授業づくりをめざしたい。

キーワード：学び合いを支える言語活動、第2期教育振興基本計画、読み語り、ウェーブリーディング、多読

1. 研究目的

1. 1. 「学び合いを支える言語活動」を充実させるために

国語の授業は、主人公の心情を想像したり、文章構成を考えたりと、頭の中だけで考えることが多い。それ故、子どもたちにとって「わかりにくい」「難しい」学習になってしまう。本実践では、「個への配慮」と「指導の工夫」を充実させることにより、楽しく意欲的に取り組める「わかりやすい」国語の授業を実現していきたい。本校国語科部では、本年度の研究テーマを「学び合いを支える言語活動の充実 ～『対話』を通して主体的に読む力を育む授業の創造～」とした。三つの対話、つまり、対象、他者、自己との豊かな対話により、子どもたちの「思考力」「判断力」「表現力」を育てていきたいと考える。そのために、特に「付けたい力の明確化」「単元を貫く言語活動」「教材との出会いの工夫」の三点を重視している。本単元では、「『4A子どもLaLaLu隊』として『読み語り』にチャレンジする」という目的をもつことから学びをスタートし、「ごんぎつね」を中心教材として学習を進めていく。それと並行して、「新美南吉」の他の作品や「きつね」をテーマにした作品を多読することを通して、単元のねらいに迫っていききたい。

2. 研究方法

2. 1. 「ごんぎつね」との出会いを通して 2. 1. 1. 付けたい力の明確化

国語の能力は螺旋的・反復的に繰り返しの学習の中でこそ身につくものである。それ故、ある単元において、どのような言語活動を位置づけるかの前に、教師から見て、子どもたちの実態を把握し、教材の特徴（魅力）を理解する必要がある。その上で、指導のねらいを十分に確認し、単元を通して子どもたちにつけたい力を明確化する必要がある。本単元では、子どもたちに「付けたい力」として、以下の三点を設定した。

○内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読する。【C読（1）ア】
○場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むことができる。【C読（1）ウ】
○文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いがあることに気付くことができる。【C読（1）オ】

2. 1. 2. 単元を貫く言語活動

単元を通して子どもたちに「付けたい力」を明確にした上で、効果的な言語活動を選ぶ必要がある。

言語活動を充実したものにしていくなかには、単元を貫いて言語活動を位置づける必要がある。言語活動を単元の一部にしか位置づけず、前後で関連のない別の言語活動を行うのでは効果は上がらない。充実した言語活動とは、子どもたちにとって学習の見通しをもてる活動であり、子どもたちにとって具体的な目的や必要に応じての活動でなければならない。さらに、指導上の重点的なねらいを実現していくために学習活動を精選していくことも重要である。

4年生の物語教材「ごんぎつね」（新美南吉作）において、子どもたちの学びを充実させていく言語活動として、「読み語り」と「多読」を取り入れた。第一次で、単元の流れをつかみ、第二次で「ごんと兵十の心の通い合い」をテーマに、「ウェーブリーディング」方式で話し合いを進め、第三次では、新美南吉作品やきつねを主人公にした作品の中からグループで相談し、一番好きな作品を選び「読み語り」（4A子どもLaLaLu隊）を行った。

本実践では、これらの言語活動を通して、ごんと兵十の行動や気持ちとその変化に着目し、想像を広げて読み進めていきたい。また、生き生きとした書き表し方、音、光、色に関するもの、心情把握のための伏線となる効果的な表現など、優れた情景描写にも注目させながら、ごんのひたむきさや兵十の切ない気持ちなどを読み深めたい。心の交流への切ない願いと、それが果たされない悲しみや互いに理解し合えた喜びというような感情についての共感が、子どもたちを「新美南吉の世界」により引きつけるものであると考える。

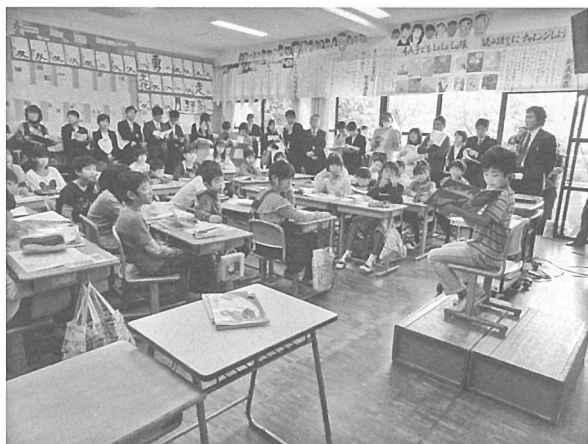


図1 教室の友だちへの「読み語り」の様子

2. 1. 3. 教材との出会いの工夫

子どもたちが、教材を自分に引き寄せて主体的に学習を進めていけるように、教材との出会いを工夫していく。例えば、同一シリーズや同一作者の作品を読みやすい環境を教室に整えることで、子どもと教材との距離が縮まり、そこで教材と出合わせることで、子どもたちの学習への関心意欲は高くなるであろう。

子どもたちが、「早くこのお話を読みたい」と思わずにはいられないような導入の工夫が必要である。

本実践では、単元に入る前に、子どもたちと教材とのやさしい出会いのために、教室に和歌山市民図書館からお借りしたおよそ50冊の新美南吉作品ときつねを主人公にした作品を並べた「新美南吉ときつねの読書コーナー」を設けた。また、読み聞かせボランティアのお母さん方に協力していただき、新美南吉作品や動物を主人公にした作品の読み聞かせをしていただいた。このような出会いを通して、子どもたちは、朝の読書タイムなどを利用し、「ごんぎつね」の学習と並行して、たくさんの新美南吉作品やきつねを主人公にした作品に親しむことができた。



図2 「新美南吉ときつねの読書コーナー」

3. 授業の実践 ～効果的な読解指導の工夫～

10時間程度の単元構成で、「多読」を取り入れた言語活動を行う場合、たくさんの物語にふれることができるメリットがある反面、読み取りが浅くなるデメリットがある。限られた時間の中で効果的な読解指導を行う工夫として、以下の三点を実践した。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 「ウェーブリーディング」で読み深める (2) 学びの筋道を振り返ることのできる環境作り (3) 「読み語り」（4A子どもLaLaLu隊）を通しての交流 |
|---|

3. 1. 「ウェーブリーディング」で読み深める

限られた時間の中で効果的な読解指導を行う工夫として、「ウェーブリーディング」を活用した。「ウェーブリーディング」とは、物語を読む視点を変えて、全文通読を繰り返す単元構成を意味する。本実践では、「ごんの性格」「ごんの心の変化」「『つぐない』をするごんの気持ち」「『引き合わない』と考えるごんの気持ち」「ごんと兵十の心の通い合い」の5つのテ

一マで話し合った。

(「うった兵十の気持ち」を話し合っている場面)

陽紀：お母さんが死んで悲しかった。神様やと思っていたけど、ほんまはごんやった。ごめんよ、ごめんよ、って、後悔している。

公平：最初は後悔して、次に兵十は疑問に思ったと思う。2パターンあると思う。ごんは、お母さんが食べたいと思ったうなぎの代わりにくりを置きに来たのか。ただいいやつなのか。

教師：今の分かる。

創司：ごんはいたずらをしようとは思っていなかった。

教師：ごんはいたずらをするつもりはなかった。いいことをしようとしてたんやな。

諒：やってしまった、という気持ち

教師：どういうこと

諒：栗とかかくれていたごんをうってしまった。

教師：こんな感じでいい。まだ言いたりやん。

公平：44段落47段落で、兵十はもともと気づいていたのか、気づいていなかったのか、そこが分からない。

教師：これどういうこと

希望：47段落で、ごんがやっていたことに気づいた。

教師：わかる？いたずらをしにきたで気づいた、前半。後半はごんがやってくれたことに気づいた。気づきが違う。

(「うたれたごんの気持ち」の話し合いに切り替わる)

☆公平は、ごんと兵十の心が通じ合ったが、通じ合っていないかは、ごんがどうして栗や松たけを自分にくれるのかを、兵十が分かっているのかどうかでちがってくるという考えをもっていた。公平のこの考えが、この時間の要所に出てくることになる。

(ごんと兵十の心は通じ合ったかの話し合いの場面)

健：ぼくは通じ合えたと思います。うなずいているから。

真理：通じ合えた。ごんはうなづいたから、兵十に分かってもらえた。

陽紀：通じ合っていると思う。兵十は神様だと思っていたけど、ごんは怒らずに、それでもずっとあげていたから。

幸介：47段落「ごん・・・」と48段落「うなずきました」から、通じ合ったと思う。心が通じ合って、目をつぶったまなずいた。

侑：兵十は神様がくれたと思っていたけれど、ごんは「ちりも積もれば」という感じであげていた。ぼくなら怒ってあげないと思う。ごんは続けてあげていた。

春美：通じ合えた。47段落に書いてある。人生の終わりによりやく知ってもらえた。

公平：兵十がもううなぎをとって、その代わりにやったらわかる。今までいたずらしてきたきつねが、またいたずらをしにきたと思っているかもしれない。

希望：通じ合えた。あとになるにつれて。

教師：最初は離れてたん？

希望：終わりにつながった。

☆公平は、ここでもごんがたぐいことをしにきたのではなく、大切なうなぎをとってしまった「償い」のために、栗や松たけを届けにきていることを兵十がわかってこそ、心が通じていることになるという考えをもっていた。この考えを、もう少し全体で話し合わせることによって、単にうなづいたから心が通じ合ったという考えを揺さぶることができたと思うが、うまく話し合いをつなげることができなかった。公平のこの深い読み取りは、ウェーブリーディングの成果であると考えられる。

3. 2. 学びの筋道を振り返ることのできる環境作り

ワークシートや付箋、ファイルを利用し、自分の考えを書き残す等、子どもたちの「学びの足跡」を残していった。

3. 2. 1. 「ワークシート」の利用

課題に対して自分の考えをまとめられる内容にした。道徳的な学習にならないよう、常に「本文に戻る」ことを意識させるため、ワークシートの上半分には本文を書き、下半分に自分の考えを書くようにした。また、「読み語り」をするときの工夫も書くようにした。付箋の取り組みと同様に主に家庭学習で取り組んだ。子どもたちにとり、自分の考えを整理するのに大変役立った。また、教師にとっては、子どもたちの考えを事前に把握するのに役立った。

3. 2. 2. 「付箋」の利用

本文の中で、「課題に対する答え」が書いてあると思うところに線を引き、付箋をはるようにした。その理由を付箋に書くようにした。本実践では、5つのテーマで話し合ったが、子どもたちなりに、自分の思いを書くことができおり、ワークシートに自分の考えを書くときや発表する際に役立っていた。



図3 ワークシート・付箋の利用

3. 2. 3. 教室を「ごんぎつね」ワールドに

「ウェブリーディング」で学習した5つのテーマについて子どもたちが話し合った内容と「読み語り」での工夫を教室に掲示した。それにより、子どもたちは、クラスでの学びを振り返り、考えを関連させながら、より深く学習を進めていくことができた。

教師：うたれたごんの気持ち。

健：48段落で、自分があげたことを知ってもらえてうれしかった。

教師：同じような考えはある？

創司：兵十にうたれてしまう前にしっかりおわびができた。

幸介：兵十にあげたのはぼくって気づいてもらえてよかった。

教師：うれしい、と、よかった、はちがうん？

春美：誕生日プレゼントをもらって「うれしい」、地球に隕石が落ちたというニュースはうそやった、だから安心して、は「よかった」。

教師：やっぱりちがうん？うれしいなん？

侑：前の授業のとき（学びの足跡を指さしながら）、ごんは死ぬ覚悟ができていた。殺されるときがきた。やっぱりな、しかたないな、みたいな感じだと思う。

（六段落だけに目を向いていた考えが、前回の授業を振り返るこの発言から、物語全体を見通した発言【つぐないをするごんの様子の変化】につながっていく。）

教師：だからやっぱりうれしかったん？

諒：死ぬ覚悟はできていた。ついにうたれてしまった。

昇一：ごんはうたれる前に覚悟をしていた。はじめはいわしボー。だんだん慣れていって、中に栗とかを置いていった。

教師：いいこと言ってくれたね。だんだん慣れていってんなあ。

（「ウェブリーディング」を重ねるたびに、「学びの足跡」の教室掲示を参考にした発言が増えていった。）



図4 「学びの足跡」の教室掲示

3. 3. 「読み語り」（4A子どもLaLaLu隊）

を通しての交流

今年度担任する4年A組の子どもたちは、「読み語り」が大好きである。毎週行ってくれる保護者ボランティア「LaLaLu」による「読み語り教室」も大変楽しみにしている。「読み語り」の効果は、本に対する興味を高め、子どもの聞く力を伸ばすことはもちろん、想像力を育み、子どもたちの情緒的な発達を促すなど効果は計り知れない。また、「読み語り」を行ってくれている保護者のみなさんは、「子どもたちの楽しそうな表情を見ていると、『次はどんな本を選ぶのか』『どんな工夫をしようか』と、次回が楽しみなんです」と話してくださる。「読み語り」は、聞き手にだけでなく、語り手にも好影響を与える相互作用をもったコミュニケーションだと言える。本実践では、子どもたちは、「4A子どもLaLaLu隊」として、「読み語り」にチャレンジした。同じ本でも、語り手が違うと本の印象も変わってくる。語り手の気持ちがより伝わるよう、声の調子や表情、動作など、聞き手に楽しんでもらえる表現の工夫に取り組ませたいと考えた。そのためには、題材へのより深い理解が欠かせない。語り手と聞き手が、ひとときの時間と空間を共有できる、心温まる「読み語り」にチャレンジできる効果的な読解指導の工夫に取り組みたい。



図5 「読み語り」に向けての練習



図6 「4A子どもLaLaLu隊」
(一年生に読み語りをしている様子)

4. 成果と課題

本実践を通して、以下の三つ観点から成果と課題を振り返ってみる。

- (1) 「ウェーブリーディング」について
- (2) 「読み語り」(4A子どもLaLaLu隊)について
- (3) 「並行読書」について

4. 1. 「ウェーブリーディング」について

子どもたちにとって、物語を一度読めばある程度のストーリーは理解できる。それ故、いわゆる「まるごと読む」という形で、「ごとと兵十の心の通い合い」という共通課題を決め、「ウェーブリーディング」方式で学習を進めていくことは有意義であった。全文通読を重ねる中で、心の交流への切ない願いとそれが果たされない悲しみ、互いに理解し合えた喜びというような感情について、行間を読み取ったり、情景描写に迫ったりしながら、第三次(本実践では、4A子どもLaLaLu隊〔読み語り〕)に意欲を持続して向かうことができた。

課題として、「ウェーブリーディング」で話し合うテーマについて、教師主導で設定してしまった点あげられる。子どもたちと教材との出会いの中で出された子どもの思いに沿ったテーマにしていくことが大切になってくるものと考え。

本実践でも取り組んだが、ワークシートや付せん、ファイルを利用し、自分の考えを書き残すなど、子どもたちの「学びの足跡」を残したり、「新美南吉とき

つねの読書コーナー」を設けるなど教室環境を工夫し、整えることにより、「ウェーブリーディング」での話し合いがより充実していくものと考え。

4. 2. 「読み語り」(4A子どもLaLaLu隊)

について

本実践を通して、子どもたちにとって、「読み語り」は大変魅力的な言語活動であると感じた。日頃「LaLaLu」のお母さん方にしていただいている「読み語り」を、低学年の子たちにしてあげるといった目的が子どもたちの意欲をより高めていた。グループや個人で「読み語り」の上手さには差も出たが、楽しく聴いてもらいたいという目的のために、友だちの「読み語り」を聴いたり、アドバイスし合ったりする姿が見られた。そこに、子どもたち同士の学び合う姿があった。また、グループで「読み語り」を聴き合うことを通して、紹介された作品を読みたいという思いをもつこともできた。

本実践では、第一次で、「手ぶくろを買いに」(新美南吉)の朗読を聞いた。「読み語り」の参考となるように、声優の佐倉愛理さん(YouTube)と女優の木村多江さん(NHK お話の国)の朗読である。この授業では、物語の内容はもちろんであるが、語り手の「読み語り」のすばらしさに注目して学習を進めた。子ぎつねは高い声で、母ぎつねは低い声で読む。同じ子ぎつねでも、「母ちゃん、目に何かささった。」は急いでいるように読み、「人間のお母さんの歌声を聞いているとき」は、うっとりしているように読むなど、「役によって声を変えていること」「点(・)や丸(○)で間をあけていること」「声を変えたり、間をあけるのが、場面によってさらに違うこと」など、子どもたちにとって参考になったようである。授業の最後に、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」の「読み語り」を行った。昔人間に追い回された自分の恐ろしい経験と「母ちゃん、人間ってちっともこわくないや」と無邪気に話す子ぎつねの様子から、「とまどい」や「不思議」な気持ちを持ちつつ、「疑っている反面、自分は間違っているのかも」という複雑な気持ちの母ぎつねの心情を「読み語り」にいかそうと子どもたちになり意欲的に取り組んでいた。ICT機器の効果的な活用は、「読み語り」にも大きなプラスになった。

一時間単位の授業の流れとして、授業の前半は、「ウェーブリーディング」での読み取り、後半は、子どもたちが選んだ文(段落)で「読み語り」を行ったが、その時間配分には課題が残った。



図7 ICT機器を活用した「読み語り」

4. 3. 「並行読書」について

本実践では、きつねを主人公にした作品のブックトークから学習をスタートした。そして、「手ぶくろを買いに」の朗読を聴くことにより、「読み語り」のイメージをもち、「ごんぎつね」の学習につなげていった。低学年の子たちへの「読み語り」では、自分たちの好きな作品で「読み語り」を行った。子どもたちは、単元を通して、たくさんの新美南吉作品やきつねを主人公にした作品に出会うことができた。

「並行読書」する場合は、副教材をどこに持ってくるのかが一つの焦点になる。まず主教材（ごんぎつね）を学習し、副教材（手ぶくろを買いになど）を順次学習する方法もあるだろうし、最初に「副教材」を学習して、その後、主教材を学習する方法もある。それぞれに効果はあるだろうが、大切なことは、「副教材」で学んだことが、「主教材」の学習の中に出され、より効果的な学習ができることである。子どもたちは、一つの教材を学習していると、その教材に集中してしまう。本実践では、「子どもたちにとって、今学習している教材が『主教材』になる」という考えで学習を進めていった。それ故に、「並行読書」を効果的に進めるためには、深い教材理解の上に立った、教師の投げかけが大切になってくると思われる。すてきな作品との出会いが、子どもたちの「次への読書」につながっていくものと考えている。

4. 4. 終わりに ～「学びをデザインする子どもたち」～

言語活動を充実させていくためには、対話的な関係が育まれた学級風土の中で、他者の意見を「受容」的に受け止め、自らの考えを「変容」させていくことの繰り返しにより、課題意識が「醸成」されていかなければ

ならないと考える。そのためには、「子どもの思い」と「教師の願い」が「つむぎ合い」、また、「個への支援」と「指導の工夫」、いわゆる「みとりと支援」の充実が、欠かせないものと考えている。

本校の研究テーマである、子どもたちが「学びをデザインする」とは、学習者である子どもたちが、自発的自主的に学習に取り組むことであると考えている。「よい授業」とは、授業を通し、学習が得意な子も苦手な子も、子どもたちが相互に協力し、自発的自主的に、問題を解決していこうとする「自主運営能力」や「自己解決力」を身につけ、授業後には、子どもたち一人ひとりが、「今日の授業は楽しかったな」「学ぶ」って楽しいな」と思える「自己肯定感」をもつことのできる授業である。子どもたちに「何をどのように教えなければならないのか」という、教師の指導技術の向上をめざす「教える側の論理」を中心とした授業スタイルではなく、子どもたちにとっての「学ぶことの意義」を考えた「学ぶ側の論理」を中心とした授業スタイルの創造をめざしている。「教師中心の一斉授業」スタイルから、「子ども中心の学び合う授業」スタイルへの転換である。本実践において、その原動力になったのが、「読み語り（4A子どもLaLaLu隊）」と「ウェーブリーディング」である。今後も、子どもたちが、三位一体の対話（佐藤学1995）を通して、国語に対する関心を深め、興味をもって自発的自主的に学びを進めていける学習活動を工夫していきたい。

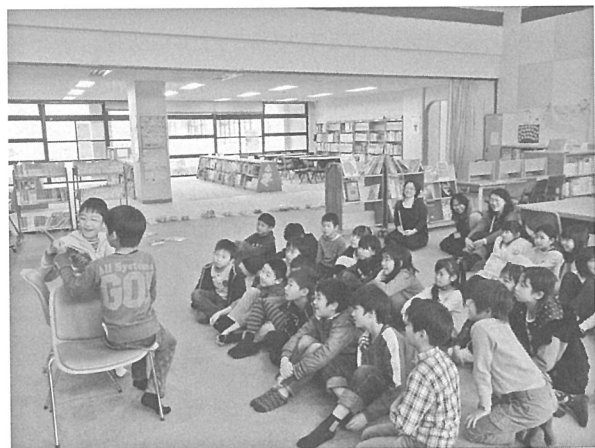


図8 LaLaLuのお母さん方に「読み語り」

参考文献

- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説国語編」東洋館出版社
- 水戸部修治（2013）「小学校国語科授業&評価パーフェクトガイド」明治図書
- 桂聖（2011）「国語授業のユニバーサルデザイン」東洋館出版社